

中国のほんの話(90)

牛にまつわる中国故事

蔭山達弥

謹賀新年。今年の干支は牛、牛にまつわる中国故事をいくつかご紹介しよう。

戦国時代(BC403～221)、秦は天下を統一しようと考え、いつも他の小国を攻撃し、併合していた。その中の小国の一つに韓がある。韓の国王は秦が攻撃してくるのを恐れ、国土の一部を秦に贈り、秦に臣下と称した。このことが楚の国王に知られ、楚の国王は蘇秦を韓に派遣し、韓の国王に、絶対にそのようなことをしないよう忠告させた。蘇秦が韓に到着するや、韓の国王にこう言った。「王様、あなた方の国は小さいですが、資源が豊かで、武器も優れている、それにあんなに多くの勇士がいる。それなのに何故、土地を秦に与え、秦に帰属する国になるのですか。」韓の国王はためらって言った。「秦はあんなに強大なのです。我々が土地を贈れば、彼らを喜ばせ、我々を攻撃に来ないでしょう。」蘇秦は首を横にふって言った。「あなたが今、土地を秦に与えれば、将来、再びあなたに他の土地を要求します。あなたは一体どれだけの土地を贈るのですか。あなたが贈れなくなった時、秦は同じようにあなた方を攻撃に来ます。」「しかし…」「しかしもへちまありません。俗語に「寧ろ鶏口となるも牛後となるなかれ」と言います。(鶏口牛後：強い勢力のあるものにつき従うより、たとえ小さくても独立したものの頭となれということ。鶏口は、鶏のくち、頭のこと。牛後は牛の尻。出典は『十八史略』)にわたりの口は小さいが、ものは食べられる。牛の尻は大きい、何も食べられない、糞をするだけだ。あなたは抵抗すんなさいませぬ。国の土地を秦に分け与え、自分から臣下とおっしゃる。これでは牛の尻とは同じではありませんか。」韓の国王は蘇秦の話聞いて、とても筋が通っていると思い、こう言った。「あなたのおっしゃる通りです。わたしは秦という大国の臣下になることを望む。土地を秦に贈らないことにします。」

牛の動作は総じて鈍いが、力は強く、昔は犁すきを引かせて田畑を耕したり、荷車を引かせたりした。汗牛充棟という成語がある。蔵書

が多くて、本を運ぶむねときは牛に汗をかかせ、積み重ねると家の棟につかえるという意味だ。牛という字を使った語句で広く知られ、よく使われるのは「牛耳を執る」という言葉だろう。「牛耳を執る」とは、一党一派の首領や中心人物となって人びとを支配することをいう。このような野望を抱いた人間が、人のうえに立てば、その国の国民にとって災い以外の何者でもない。国民を分断した選挙での敗北を一切認めようとしない超大国のリーダー、詭弁を弄し続け数々の疑惑を残したまま病気で突如辞任した指導者、今日でも枚挙にいとまがない。出典は『春秋左氏伝』定公八年。春秋時代の諸侯が同盟を結ぶ時、盟主が牛の左耳を切り取って、他の同盟者とその血をすすり合ったという故事。牛の耳を切り落とすのは盟主となる地位の高い者の役目でなく、同盟を誓い合う者の中で最も地位の低い者の役目である。まず盟主が牛の耳の血をすすって、その後、盟主が決めた順序に従ってすすっていくのである。

去年は、Covid-19という人類にとって大きな災厄が降りかかった一年だった。カミュの名作『ペスト』が多くの人々に読まれた。ちなみにペストをわが国では黒死病と言うが、中国ではペスト菌を媒介するネズミをとって「鼠疫」という。新しい年が、安寧な一年であることを願って、「牛を桃林の野に放つ」という故事を、読者諸兄に贈ろう。この故事は『書経』周書、武成にある。周の武王が殷(商)を征伐し、「厥四月、哉生明、王来自商、至于丰。乃偃武修文、归马于华山之阳、放牛于桃林之野、示天下弗服。」(その四月、月が輝きはじめた日、王は商から豊におかえりになった。そこで軍備をといて文治に努力された。軍馬を華山の南にゆかせ、役牛を桃林の野に放って、それらをもはや用いないことを天下に示されたのである。；尾崎雄二郎監訳) 武王は戦争に用いた牛を野に放し飼いにして、自由にさせた。戦争がすんで平和が来たことのたとえなのである。

かげやま たつや(非常勤講師・中国文学)